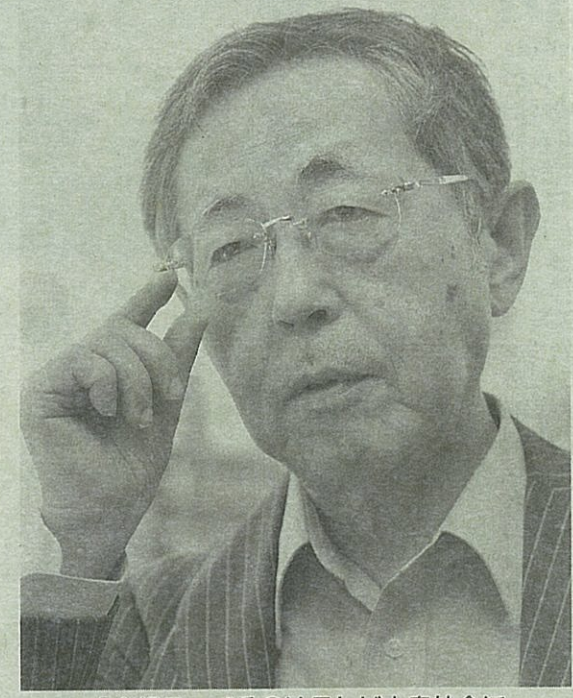


本よわくし書

関西館
本の価格は税抜きです

関西大学東京センター長
竹内洋



「今起こっているのはテレビ大衆社会に対する揺り戻しではないか」と語る竹内洋さん(大阪市内で)＝泉祥平撮影

想像された民意 社会支配

「大衆社会の劣化」が言われて久しい。その歴史の経緯とメカニズムを、竹内洋・関西大学東京センター長(歴史社会学)が『大衆の幻像』(中央公論新社)で説き起している。

いまの日本社会を「政治経済のみならず、学問や文化までもが」大衆の意向」を先取り迎合しているポピュリズム(大衆迎合主義)の「極北」とみる。

大衆社会の構造転換が起きたの

現代社会は、どこへ向かうのか。混乱の中で自分の立ち位置を確認する一助となりそうなお、評論集と学術エッセーが相次いで刊行された。

(西田朋子)

京都大学
人文科学研究所准教授
藤原辰史

「食は文化行為。そのダイクサイドを私たちは素通りしていないか」。藤原辰史・京都大学人文科学研究所准教授(農業史)の『食へのことと考えること』(共和国刊)は、どこかいびつな現代の「食」をとらえ直す試みだ。

20世紀ドイツを中心に食の歴史を研究する。「美しい農村」「自然との共生」などのスローガンがナチス政権の下、侵略と他民族迫害の根拠になり、システムキッチンは食を単なる栄養摂取と考え、人を機械とみなした戦時下の台所合理化運動に起源をもつ……。

食品偽装、不純物混入事件なども、現代特有の問題ではなく、「食

「大衆の幻像」 新刊を考える今 混迷の

は1970年代後半だという。社会階層の液化化が進み、エリート(上位者)に追随せず、自らの権利と不満を主張する「新中間大衆」が登場。大衆の力が社会を覆い、マスメディア、特にテレビが「民意、世論らしきもの」を盛んに流すことで「大衆の幻像」が独り歩きを始めた。

それは大衆そのものではない、「想像された大衆の意向が空気となって支配する大衆圧力釜社会」だ。国会では「国民の皆様」、病院では「患者様」と祭り上げられ、政治家、知識人も含む、あらゆる

べものが商品化されて以来、くり返されてきた現象です」。

食べものとはつまるところ、動物の死骸やその加工品に過ぎないのだが、「私たちは食べもの」という物語を楽しんでいる」。

物語には幻想も含まれる。企業が制作する広告メッセージがそれを肥大化する。

食べもの本来の物語を取り戻す

いびつな「食」とらえ直す

ため「家族や仲間と協力して料理し、食べる、肉や野菜がどのよう

に生産されているのかを知る、といった地道な営みを重ねていくよりほかない」。

食べることをもっと社会で共有しようとする。例えば、ショッピングセンターのフードコート。赤ちゃんと連れのママ集団、参考書持参の学生、様々な立場や背景の人が集い、くつろいでいる。それは「都市生活者の貴重な休憩所。セーフティーネットですらある」。

隣とのつながりは希薄だが、オープンである飲食空間に読書会や音楽、議論や交流を持ち込めないか。かつてカフェやサロン、居酒屋が世論形成の場となり、市民社会を支えたように。すべての人にかかわる「食」の文化を回復させることで「政治や社会が抱える多くの問題は、楽しい方向にもって

歯止めをかけるのは 実直に生きる「堅気系」

人が「大衆」に平準化された。一方で「民意」を錦の御旗に、主張や改革が押し通される。

そんな超大衆社会に歯止めをかけるのは誰か。「誇りをもって日々の仕事に取り組むノンエリート」の存在ではないか。実直に生きたい、困った人がいたら助けたいという堅気系の人、時代が変わっても一定割合で存在する。今の大学生を見ていても、そう思う」

知を動かせるのが「インテリ系」、身体優先が「ヤンキー系」なら、「堅気系」は情と常識が先に立つ。「自己主張を好まない彼らの実像は、メディアや知識人の言説にすくい上げられにくいのだが、その底堅さをもっとクロージアップしてほしい」

自らが発した意見は、本当に自分の頭で考えたものか。時代の空気を反すうしているだけではないのか。「各自がそう問い直すだけでも社会はかなり変わる」

書店探訪

外壁から車が飛び出す装飾が目印。天井には芸大生のイラスト、庭には4匹のカメを放し飼いの不思議な空間だが、居心地がいい。

店主の山下賢二さん(42)は京都出身。東京で編集者や古書店、京都で

自分流 不思議空間

新刊書店の店員を経験し、2004年、京都大近頃の「流行りに背を向け、自分の生活スタイルを探すが住む町」を選んで開店した。

サブカルチャーやアートなど客が求める分野の品をそろえを充実。古本の貸借もあり、他に店舗を持つ業者



市内のカフェや映画館に棚を借りて出す。今年5月、和歌山県新宮市の小学校廃校舎に開店した「book cafe ku」にも独自の世界を広げつつある。

(麻)

新刊紹介

『盆おどる本 盆踊りをはじめよう!』 盆踊ろう会編
なぜ夏の夜、輪になって踊るのか? 全国に何種類くらいある? もともとは祖霊や精霊への供養だったり、宗教的恍惚に至る集団行動だったりした盆踊り。今なお各地で新しい踊りが生まれ、ハワイにもあるという。その伝統の奥深さと現代性、作法、踊りの輪に入るコツを、イラスト入りで楽しく伝える入門編。内気な主婦が盆踊りを通じ、地域に溶け込むまでを描いたチャンキー松本氏の漫画もポップで魅力的だ。

(青幻舎、1600円)

『怪談狩り 赤い顔』 中山市朗著
現代怪談『新耳袋』の著者による実話に基づく百物語。地元大阪で年4回ほど怪談会を開くなどして聞き集めた約5000話から選んだ。梅田にあった劇場に姿を現すと芝居が大入りになる少年や、大阪の古着屋で売っていた怖い夢を見るミリタリージャケット。慣れ親しんだ場所ですつと遭遇するかもしれないと思わせる出来事が続く。日常の裂け目に潜む恐怖が顔をのぞかせる。

(KADOKAWA メディアファクトリー、1200円)

『雪の香り』 塩田武士著
新聞記者の風間は、気が強く謎めいた恋人の雪乃に学生時代から振りまわされっぱなし。ある日、刑事に耳打ちされた捜査情報の中に彼女の名前があった。肝心なことは何一つ明かさず、最愛の女性は一体、何者なのか。早春の北山、祇園祭、五山の送り火、鴨川の雪景色——2人がデートを重ねた京都の四季が美しい。作家は元新聞記者。事件記者の生態も生々しく、真に迫る。(文芸春秋、1650円)

トーク「大阪から考えるジェントリフィケーション」 9月13日午後3時、ジュンク堂書店難波店(大阪市浪速区、☎06・4396・4771)。無料。N・スミス著『ジェントリフィケーションと報復都市』(ミネルヴァ書房)刊行を記念し、訳者の原口剛・神戸大准教授がジェントリフィケーション(土地の高級化)をテーマに酒井隆史・大阪府立大教授と対談。

高田郁さんサイン会 9月14日午後2時、宮脇書店大阪柏原店(大阪府柏原市堂島町、☎072・971・8461)。みをつくし料理帖シリーズ第10巻『天の梯』の購入者、先着100人。

イベント

*関西の本にまつわる話題を、月1回紹介します。